國學院大學学術情報リポジトリ

外国語研究室の半世紀：別れた友の話など

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 欣二, Ito, Kinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000017

外国語研究室の半世紀
—別れた友の話など—

伊藤欣二

一、はじめに／個人的な挿話

はじめに簡単な自己紹介、ついで本論の予告編めいたことを言っておきたい。

わたしは外国語研究室所属の英語教師として國學院大學に昭和三十八年から平成二十年まで四十五年勤務した。そして定年退職したあとも、平成二十三年三月まで非常勤講師をつづけた。それでもまだ、「半世紀」というにはちと足りないが、長く籍をおいた者のひとりとして外国語研究室、通称〈語研〉の古き良き時代をふりかえって、その特別な空気を記録しておきたいと思う。語研の最良の半世紀は、わたしの個人的な半世紀とは少しずれるけれど、本学の戦後の歴史的変革期と重なる部分が大きいと信じている。

わたしの専攻は英文学、特にイギリス小説研究で——学んだことは多くないが、長生きしてつくづく思うのは、人間は〈物語する生き物〉だということだ。文学に直接関心があるなしに関係なく、人はみなそれぞれに物語を紡いで生きている。生きるとはつまり、そういうことだという思いを深くしている。ここでも語研の半世紀の歴史をふりかえることで、わたしなりに

物語をひとつかたろうとしているのだと、あらためて思う。[1]

唐突だが、たまプラーザ・キャンパスに行くことはあるだろうか。駅前がずいぶんと変わった。つい先日、家内に連れられて行って、その変わりように驚いた。おまけに、こんなことがあった——

駅ビルの商店街を歩いていて、向こうから来る家族連れの男に呼び止められた。相手はひとまわり以上は若年で、さらに年若い感じの妻女を連れていた。男は杖をついていた。

「先生、ボクが分かりますか」と懐かしそうに声をかけられた。最初は人違いかと思ったくらいだから、正直、全然分からなかった。頭の中で、知っている学生の顔が走馬燈のように回った。

おぼろげな記憶の中から浮かびあがったのは、どうやら学生ではなくて、かつての同僚、研究室は違うが、いっしょにテニスをして遊んだ仲間の顔だった。それでもまだ確信には遠かったし、名前が出てくるどころではなかった。

いまはテニスもできない身体になっている様子だ。わたしは挨拶のつもりで、杖を持っていないほうの手を握ったが、その手に何の反応もなかった。誰だか分かるか、という相手の問いかけには、後から思うと、こんなになってしまったという自嘲的な意味合いがあったかもしれない。そういうわたしも実は、大きな手術をうけたあとのリハビリ期にあったから、記憶力にいささか問題があった。

「前より太ったね。ぼくはこんなに痩せたけど」とたわいないことばをかわしただけで、そそくさと別れた。だが、そのことが——せっかく声をかけてくれたのに、ろくに話もせずに別れたこと、もっとあれこれしゃべればよかったのにという思いが、いつまでも残った。

なぜこんな話をするかと言えば——それはわたしを今日のこのテーマへと呼びよせた挿話のひとつだからだ。退職して縁がなくなりかけた大学にまた呼び出されたみたいに、今日のテーマを想起させられた出来事だった。

またひとつに、知った人の名前も顔も思い出せない、固有名詞が出てこない、といったことがふえてきた。そんなわたしが遠い過去をかたるというのは、どういうことかと、あらためて問いかけられた気分だった。

そして何よりも、あのときしなかったこと、できなかったことが心に残った。後悔の念をいつまでも引きずったからだ。

そのことを、その夜わたしは家族との会食の席でも話題にしたし、いまここでもまた話している。つまり、話しそこねたこと、しそこねたことを、当人にではなく別の人にする——たぶ

ん、これが物語をすることの皮肉な原動力なのだろう。

もっとこうすればよかった、ああ言えばよかったという気持ち――たぶん、これが歴史をつたえるとか、とりかえしのつかない過去の出来事についてかたり、何かをバトンタッチしようとするときの底流にあるものかもしれない。

たまプラーザでのこの個人的挿話は、彼の名前や人物の輪郭がはっきりするにつれ、わたしの中でさらに意味をひろげてきた。ただここで言いたいのは、彼に対してだけでなく、これまでにふれあったほかの多くの人たちに対しても、同じような思いを抱いているということだ。

外国語文化学科のこと

わたしの在職期間をもとに語研の歴史をふりかえるが、記憶の不確かな老人のすることだから、〈昔話〉をかたるというのに近い。とはいえ歴史や伝統も、客観的な事実が独立してあるわけではない、物語みたいなものだと言うこともできる。

最初にまず語研の〈大いなる遺産〉というべきものについて――これにも、見えるかたちで残っているもの、見えないかたちで受け継いだもの、あるいは、もう失われてしまったものが考えられる。それらはたとえば、本学における外国語教育のあり方、異文化の受容のし方に反映されているはずだ。

だが、その遺産のうちでもっとも分かりやすいかたちを言えば、語研が母体となって文学部の新しい学科、外国語文化学科が創設されたことだろう。大学改革の時代に、ただ上から与えられたのではなく、自分たちの主体的な努力で、暗中模索と試行錯誤のすえに新学科を立ちあげたのだった。

学科創設までの苦労と裏話は、われわれの世代の物語だが、ここではそれより前の世代、学科を作るなんてことよりも、ひとりびとりが文学で独り立ちしようと熱心に考えていた人たちのこと、そして彼らの残した遺産、もはや失われかけている伝統に目をむけたいと思う。残っているものと失われたものとがあるならば、いまはないものに焦点をむけるのが、やはり物語本来の役目なのだろうから。

わたしの昔話を要約しておけば――

(一) 外国語研究室があったからこそ外国語文化学科も生まれたこと。そしてそれがどんな土壌から生み出されたかということ。

(二) 外国語研究室、すなわち一般教養科目担当の教師集団とその部屋の自由闊達な空気が、すくなからざる刺激を学内外に提供したということ。

〈三〉その語研の歴史的役割を見定めることは、すなわち國學院における〈外国の意味するもの〉を探ることにほかならないということ。

二、若き文学者たちの肖像

わたしが就職した昭和三十八年は、本学の政経学部から独立して法学部ができた年である。それはつまり、第二次大戦終結直後のベビーブームが大学進学の時期を迎え、私立大学の門戸拡張を告げるときであった。

安保闘争の余波をいたるところで感じさせる政治の季節でもあったが、まだ学内には、いくらかおおらかでのんびりした気分が残っていた。特に語研は、やや時代離れした、陸の孤島めいた空気があった。いわば、本学の中の〈外国〉のような場所だった。

どういう意味で〈外国〉かと言えば——第一に、文学部の他の研究室とは、大いに性格を異にしていたからだ。本学出身者（「院友」と呼ぶ）はほとんどいなかった。そんなことが、まだ少し意味を持った時代だった。

これはまだ、本学構内で外国人教師の姿を見ることはゼロにひとしい時代の話だ。いうなれば、語研の教師たちがその〈他国者〉だったのだ。事実、いつやめるかもしれない、多少無責任な、アウトサイダー的な立場にあった。そのぶん、ポストにすがりつくという感じからは遠かった。そして、若くてもすでに世間に名の知られた人たちが幾人もいた。

わたしは来る前から、ここが威勢のいい語学教師のたまり場だということは、うすうす知っていた。噂どおり、そこはまさに意気盛んで自由闊達な場所だった。たがいを呼び捨てにしあうような、隔てのない人間関係がみられた。真似をしてあまり生意気にならないように、とわたしは指導教官から就職前の忠告をうけたが、生意気になるどころか、才気煥発なやりとりの中で、ひたすら小さくなっていた。

語研は本質的にリベラルな空気を持っていたが、國學院にもそれを容認するだけの懐の深さがあったと思われる。それは大学紛争時に、しばしば引用された校歌の文句「外つ國々の長きを採りて、云々」に象徴されるものであった。

歴史をふりかえるとき、ほかのどこにもないものがここ外国語研究室にはあった、とたしかに言うことができる。わたしがその一員となった昭和三十八年、語研の基盤はすでにできあがっていた。どころか、いわばその活動の黄金期にあったとさ

え思える。

かつて語研のいちばんの黄金期を築いた人たちは、すでにおおかた鬼籍にあるが、國學院にこの人ありと知られた代表的人物、丸谷才一が先年、帰らぬ人となった（平成二十四年十月十三日没、享年八十七歳）。その後、年末から年始にかけて多くの追悼記事が新聞雑誌の紙面をかざった。

そうした追悼文のひとつを、本学にゆかりの深い岡野弘彦氏が「丸谷さんと未完の小説」と題して『短歌』十二月号に発表していた——

丸谷才一さんが国学院大学に若い英語教師として赴任したのは、折口信夫が亡くなった翌年、昭和二十九年のことだった。

私の居る折口記念古代研究室と語学教師の集る語学研究室が隣りあわせになると、俄に彼らとの交流が密になった。丸谷さんとドイツ語の中野孝次は私と一つ違いで、同じ戦中派としての共感があり、私は彼等からジョイスやカフカの話を聞くのが楽しく、彼等から折口学や王朝和歌の話をよく聞かれた。そのうち語学研究室で話すメンバーもフランス語の橋本一明、ドイツ語の川村二郎、フランス語の飯島耕一など多様な顔ぶれになり、安保反対の動きが激しくなるにつれて、われわれの討論も激しくなることがあった。戦争によって青春など持てなかった我々にとって、あの時期が遅くやってきた青春という感じであった。

丸谷才一だけでなく同時代の語研の人たちの名前を連ねて、「遅くやってきた青春」を回顧している。

追悼記事の多様さが示すように、丸谷才一の仕事は実に多岐にわたるものであった。第一に英米文学の翻訳と紹介、特にジョイス『ユリシーズ』の訳業に代表される。第二に創作活動、イギリス風俗小説の伝統を思わせる数々の長編小説を残した。「人間を世俗の場において表現する」のに長けていたと池澤夏樹は評した。第三に文芸評論、源氏物語、後鳥羽院、忠臣蔵など、西欧文学との比較の眼で古今の日本文学を明快に論じた。

さらに日本語についても一家言を持っていたし、軽いエッセイや読みもののたぐいにも才筆をふるった。特にゴシップ好きなところ、何でもない話題に枝葉を茂らせ、花を咲かせるたぐいの座談のおもしろさは、語研のその遅い青春時代の雰囲気をよく伝えるものだろう。

「未完の小説」は残したとしても、丸谷さんの執筆活動は最

晩年まで盛んだった。岡野弘彦や大岡信らと久しく連歌を巻きつづけたことは、長谷川櫂の追悼文「玩亭先生、さやうなら」（『俳句』十二月号）にうかがい知ることができる。病床にあっても最期まで文学に遊ぶことをつらぬいた姿は、真の意味で〈文人〉と呼ぶにふさわしいものだったと思わせる。

時代区分のこころみ

語研の歴史は何によって区分できるのだろうか。

たとえば、それは外国語（特に英語以外のいわゆる第二外国語）の履修単位の変遷によってだろうか。あるいは、場所の歴史、すなわち八王子とか相模原といったキャンパスの変遷によってだろうか。あるいは、学部や学科の新設・増設といった大学の発展拡充段階によってだろうか。

だがそれよりも、（岡野弘彦が名前を挙げた）語研を代表する人物の登場・退場といった〈ヒューマン・ファクター〉によって、やはりいちばん物語の時間は刻まれるだろう。すなわち、丸谷才一の退職、橋本一明の死去、中野孝次の退職といった出来事で大きく区分できるのではなかろうか。

語研の草創期は昭和二十八年から昭和三十八年までの約十年間で、この間に研究室の基礎が確立された。これがまさに語研の青春時代だった。渋谷以前に目白とか久我山にキャンパスのあった頃の話は（菊池武一先生の口からもれ聞いたが）、なかば伝説時代に属するものだ。

語研は新進気鋭の文学者集団の根拠地としてつとに有名だった。時代は政治の季節を迎えようとしていたが、語研は久しく文学の時代を謳歌していた。のちの『ユリシーズ』の訳者たちを中心にして『フィネガンズ・ウェイク』の読書会が進行中であり、そのあと、橋本一明の呼びかけで米川良夫を囲むダンテの読書会も始まった。われわれ英語教師も当今とはちがい、しゃべる英語をかるく見て、アメリカよりもヨーロッパに目を向けていた時代だった。[2]

三、外国語研究室の青春

長くいたひと、ごく短いひとの違いはあったけれど、実に多くの人たちがここを通りぬけていった。それだけ職場としての魅力があったと思われる。

名前を挙げれば切りがないが、その中でも國學院にこの人ありと第一に挙げるべき人物は——中野孝次さんだ。丸谷才一と並んで、いや丸谷さん以上に本学と深い関係にあった。

両氏ともに大正十四年生まれ、ほぼ同じ時期（昭和二十八年）に専任講師となった。中野さんは在任期間が長かったから、われわれ語学教師とのつき合いも長く、いちばんよく遊んだ仲だ。大学紛争時に激職の学生部長を務めたときのことは特に印象深い。語研の片隅でだれかと碁をかこむ姿もおなじみの風景だった。

中野孝次さんは性格的に開けっぴろげで、人づき合いもよく、またいろんなことが好きだった。スポーツもそのひとつで、スキーの上手いのが自慢だった。

中野さんはいつまでも歳とることを忘れた青年のようだった。酒のつき合いもよく、そして飲めば、若者のように仕事の計画を熱っぽくかたった。退職後も、図書館に本を借りにきたついでに顔を出して、研究室の〈時計が止まっている〉とからかったりしたものだった。

わたしが学生時代に中野訳でカフカを読んでいることを本人の前で口にしたとき、「だったら、もっと尊敬せよ！」と言われたことがあった。たしかに尊敬は足りなかったかもしれない。だが、わたしがその場で言いたくて言わなかったことは、尊敬する以上に「ぼくらはみな中野さんを愛してますよ」ということだった。

いろんなところでホモ・ルーデンス（遊び人）の一面を誇示した中野さんだが、自身の小説がかたるように、根は謹厳なマジメ人間だった。だから、職を辞するときも（みんなして慰留したが）、あとのことを考えて、後任に種村季弘（かつて専任講師として在籍したことのある）を連れてきた。中野さんは二〇〇四年没で、同じ年に種村さんも亡くなった。

言うまでもなく、種村季弘は怪奇幻想の分野で多くの独自の著作を残し、広く知られた人物だが、國學院で芥川賞作家の諏訪哲史を育てた師としても知られている。また、スポーツ小説を開拓した夭折の作家海老沢泰久は（その恩師というべきは岡野弘彦さんだが）、早くから、生意気な学生だった時分から語研に出入りしたひとりだった。語研の存在がいろんな意味でよき刺激を与えていたことをかたる事例だろう。

中野孝次の体験的教育論

こういう話をしたとき、学生から何か参考になる本はあるかと訊かれた。そのときは思いつかなかったが、あとで格好の一冊を思い出した。中野孝次が「俊秀の揉み合う研究室」の青春時代をふりかえっている——

結局ぼくは、ほんの四、五年いるかと考えていたこの国学院大学に二十八年も勤める結果になったのだが、その理由はただ一つ、ここが居心地のいいところだったというに尽きる。思いもかけずぼくは自分に一番向いた大学に当たったのであった。

時代もよかった。ちょうど日本が戦後の窮乏状態から復興し、やがて高度経済成長時代へと上ってゆくころで、現在のように上から下までぴしっと管理された時代ではなかった。自分たちが時代を作ってゆくんだという気分があり、事実年々大きくなってゆく大学の中ですべては新しく自分たちの手で作られていったのである。

たまたま英語の丸谷才一、仏語の橋本一明、独語のぼくと、同年輩の三人の文学青年が集まったことから始まった外国語研究室は、前に言ったように次第に若い俊秀の集まる場所になって、かれらの揉み合う中から若々しい熱気が生じた。ぼくはいま顧みても、あの昭和三十年代の国学院大学は他に類のない、活気に溢れる、若々しい、生産的な研究室だったとおもう。みなで集まってはよく飲んだり遊んだりしたが、そこで中心となるのは文学への熱い思いで、仲間から刺激を受け、触発されながら、何かに新しく取組んでいこうと鼓舞されるようだったあの気分は、いいものであった。独学者だった少年時代から他人と協同して生きる習慣を持たなかったぼくは、このめぐまれた環境の中で初めて仲間と一緒にいることの良さを知ったと言ってよい。

誰かがいい仕事をすればそれにはげまされて、自分もいい仕事をしなければ、と駆りたてられる。誰かが自分の知らない文学について語れば早速それを知ろうと刺激される。ぼくらの外国語研究室は、よその大学のように英仏独中と部屋を別々に分けないで、大きなサロンにみなごちゃまぜに集まる寄り合い所帯にしていたから、ここでは英仏独中といった区別もなしにただ文学というものがあり、小さな専門に別れることなく何でも知らなければならぬ雰囲気だった。これは誰にとってもなかなか教育的であったとおもう。

ぼくらの研究室のそういう実験はよそでも話題になったらしく、外からも評価され、そうすると新しく大学を出た優秀な外国文学者がよろこんで応募してきて、さらに活気が加わるといういい結果をもたらした。数年いてすぐ国立大学に引っぱられて去る者も多かったけれども、それもか

えって循環をよくし、いれ替りたち替り個性的な人物が集まったのだった。　――『わが体験的教育論』（岩波新書、一九八五）

優秀な人材が集まり、活気を呈していた昭和三十年代の刺激的な雰囲気を楽しそうに回顧した文章である。菊池武一主任のもとで、いわゆる語研の三羽ガラスといわれた丸谷・橋本・中野さんたちが威勢のいい同世代の仲間たちを呼び集めていた時代だ。

しかも彼らの活動は文学だけにとどまらなかった。「大学の中ですべては新しく自分たちの手でつくられていった」という國學院だけではない、ほとんどすべての大学の拡充発展期だったからだ。

本書の宣伝文にある――「職人の子に学問はいらない」と進学の志を断たれた著者は、独学で熊本五高に進み、軍隊生活のち大学で文学を志す。戦時下の青年の自己形成の歴史をふり返り、更に戦後の大学教師としての経験をふまえつつ「教育の根本は独学」「友人こそ最高の教育機関」と説く、個性的な教育論であると。

たしかに中野孝次の精神的経歴と生きた時代の具体的な断面を分かりやすいことばでかたっている。私的体験をビルドゥングス・ロマン（教養小説）へと高めるこころみだった『麦熟る日に』以下の小説三部作の世界へとわれわれを導いてくれる本でもある。

この教育論の背後に見え隠れするものを簡単なことばですくいとれば――この時代を生きた誰もが知っている「暮らしは低く、想いは高く」というフレーズになるのだろう。ある意味で戦後日本の精神構造を支えたともいえるキーフレーズ（アテネ文庫の宣伝文句にされたワーズワースの一節）だが、この本では「低い生存」という言い方をしていた。

そしていまひとつ、「教育の根本は独学」「友人こそ最高の教育機関」という二箇条――それは自己教育と友人関係の重要性ということだが――このいわば相反する組合せに、中野流教養小説の自己形成というメインテーマを見いだしている。語研の修業時代の青春像をふりかえるわたしは、それを〈別れた友〉のテーマと言い換えることになるだろう。

四、積み重なる場所の記憶

歴史は場所と強く結びつく。また時間は空間化することに

よって、より深く認識されるものだろう。外国語研究室は大学図書館と切っても切れない関係にあった。かつてそれは旧図書館の建物内にあったし、また図書館と隣接してあったからだ。

語研の部屋は時代とともに旧図書館の二階から三階、三階から四階と上昇移動してきた。そして五階はないから、そこからさらにたまプラーザ・キャンパスへと空間移動したとも言える。いずれにせよ、語研が図書館と深く結びついていたことは、象徴的な意味をもっていたとさえ思える。

四階建ての旧図書館は神殿と向かいあう位置にあって、その最上階からキャンパスの前庭を見渡すことができた。いわゆる〈眺めのある部屋〉だった。よく見ると、ヒマラヤスギに洗濯ハンガーがひっかかっている——語研の誰かが放り投げたのではない、カラスのしわざだ！

神殿を見下ろすように向かい合う位置関係にあったから、旧図書館の建物全景をおさめた写真はほとんど残っていない。ハンドアウト図版用に大学広報課から借りてきた部分的な画像から、いまとなっては全体を想像するしかない。が、これを見た教職員の何人かが思わず「懐かしい！」と声をあげた。われわれ旧世代にはそれほど〈心に残る絵〉の一枚だ。

ここが〈外国〉語研究室だったということを裏返して言えば、広い外の世界へと展望のひらけた、外気にあふれた部屋だということだった。

「時は流れない、積み重なるのみ」だと誰かが言った。記憶はいわば半透明の層の重なりあいだともいう。[3] それにならって語研の経てきた時間を比喩的に拡大表現すれば、一個の積み重なった建造物になる。それがすなわち、旧図書館の四層からなる建物なのだ！

研究室の段階的な発展史を省略して、この建物での最終形態を図式的に提示すると——広い談話室、それをとりまくように各国語文献の書棚の並んだ（そしていくつか机のおいてある）部屋、参考図書室、会議室（兼・小演習室）、さらには老人ホームなどと綽名された（うたたねもできる）部屋が付属していた。

広い談話室と参考図書室に研究室の形態のいちばんの特色があった。それは語研の大切な伝統として、長く守られてきたものだった。

英独仏中（さらにイタリア語もくわえて）の外国語担当スタッフが一堂に会しているところ、それが談話室だった。中野孝次の言うように、専任・非常勤の区別なくそこにたむろして談論風発を楽しむ場であった。他に類を見ない自由闊達な研究室の空気は、特にその共通スペースに象徴されるものだった。

専攻分野間の壁、年齢の上下差にとらわれない、人間関係の距離の近さ、濃密さがあった。反面、不作法で非礼、歯に衣着せぬ容赦のない面もあった。（たがいに呼び捨てか、「さん」づけで、「先生」などと言うと、バカにされたものだった。）それだけみな若かったということでもある。

少しオーバーに言えば、一種の〈文化的サロン〉を形成していた。知的な会話を楽しむ集会のような雰囲気だった。活気にあふれていた時期（わたしが着任した頃）の語研は、そんなふうだった。専任も非常勤も、教師も学生も、みなが一堂に会するという場だった。だから、サロンというキザなひびきを避けるなら、〈コモン・ルーム〉と称すべき場所だった。

創造的な場に共通する特色がここにも見られた。つまり、各人がてんでんにおしゃべりするのではなく、みんなしてひとつテーマにかかわり、枝葉をひろげ、会話を弾ませる。そして、つい話に夢中になって、教室へ行くのが遅くなる。が、そこにいただけで、楽しい時間を共有した、あるいは、何かしら勉強になった、という思いがあとに残るのだった。

談話室と並んで、いまひとつ特徴的なのは、参考図書室、略して参考室だった。各外国語の広く参考書と称せられるもの、辞書・事典などを集めた部屋で、その参考書類の充実ぶりは、他大学に自慢できるものだった。本のない時代に先輩たちが苦労して蓄積したものであり、語研の学究的スケールがそこにもうかがえた。

忘れてならないのは、昭和三十年代から四十年代は、まだタイプライターからワープロへと変換する前の時代であったことだ。そしてウィンドウズＰＣの時代、インターネットの時代はまだまだ先の話だ。

ネットでかなりのことが調べられるようになって、参考室の意味も大きく変化した。時代によって、知らないことを〈調べる〉作業の仕方や性質がずいぶんと違うのだ。翻訳にたずさわることの多い語学教師たちにとって、かつては本で調べることが唯一の手段だった。調べる本のあるところが、つまり参考室だった。

そう、たとえば、画家ゴヤのファースト・ネームは何というのだろう、と調べに行くところ、それが参考室なのだ。言うまでもない、飯島耕一の有名な詩のタイトルだ――

何にもつよい興味をもたないことは
不幸なことだ
ただ自らの内部を

眼を閉じて　のぞきこんでいる。
何にも興味をもたなかったきみが
ある日
ゴヤのファースト・ネームが知りたくて
隣の部屋まで駈けていた。

Ⅳ

三年前　山を見ていたあの男が
もう生存を知覚することがない
とはどういうことか。
……　……

Ⅴ

生きるとは
ゴヤのファースト・ネームを
知りたいと思うことだ。

談話室でしゃべっていて、気になったことを調べに「隣の部屋まで駆けていく」。むろん隣の部屋はどこでもよいのだが、語研の参考室から生まれた一編ではないだろうか。すくなくとも、飯島耕一が國學院時代にヨーロッパ留学して、そのあとで生まれた詩作である。

詩人はうまいことを言う、とその一節を引用しながら、たしか参考室の入り口で中野さんがもらしていたのを思い出す。飯島耕一詩集『ゴヤのファーストネームは』（青土社、一九七四）は第五回高見順賞をうけた。装幀は、同僚の詩人安藤元雄の手になるもので、五版を重ねたという。

五、橋本一明と『二十歳のエチュード』

前の世代から受け継いだものは、談話室や参考室にみられるオープンな研究室のあり方だった。われわれはみんな、いわば〈ひとつの部屋〉で暮らしていたのだ！　ひとりびとりが自分だけの城に閉じこもることをしなかった時代だ。だからこれは、いまや永久に失われてしまった伝統の最たるものと言えるだろう。

以前と変わってしまったものは、ほかにもいろいろある。かつての活気を失った語研の沈滞ムードを中野孝次は辞める前によく嘆いていた。

語研がもっと活気に溢れていた時代の忘れられない人たちは大勢いるが、第一の功労者として主任の菊池武一の名を挙げて

おかなくてはならない。丸谷・中野より三十歳近く年長で、岩波文庫のシャーロック・ホームズやスコット『アイヴァンホー』の翻訳で知られる英文学者である。古武士の風格をそなえた人物だったが、われわれ若い教師を対等にあつかってくれた。

だが、ここで特筆すべきは、若くして亡くなった橋本一明の名前であろう。哲学者の竹内芳郎や詩人の飯島耕一など、多くの優秀な人材が〈ひとつの部屋〉に集まったのは、橋本一明の功績によるところが大だった。

橋本一明は、多くの人に惜しまれながら若くして斃れた才能豊かな人物だった。ひろい交遊関係をもち、常勤・非常勤で多くの優秀な人材を語研に呼び集めることをした。専門のフランス文学以外にも、B級映画の脚本をずいぶん書いた、と本人の口から聞いたことがあるが、その方面のことを正確に紹介できる知識をもたない。

中野孝次はことあるごとに橋本（自分より二歳年下の）の早すぎた死を悼んでいる——

一九六九年、その年に在外研究員としてパリに行くことに決まったいた橋本一明が出発直前にとつぜん発病し、初めは肋膜炎かと言われていたのが肺ガンと判明して、半年も苦しんだ末四十二歳の若さで死んだ。思いもかけなかったこの橋本の死は、さきに丸谷才一が辞めたこと以上に大きなショックをぼくに与えた。……

『『実朝考』は」ぼくの世に問うた最初の文章であった。よくも悪くもあれには当時の思いつめた気持ちが反映していて、そのむこうに恨みをこの世に残して死んだ橋本一明の顔がちらちらするのである。——『体験的教育論』

一明がいなくなって一番感じるのは、あたりが急に静かになってしまったことだ。いつまで待っていても何も起こらない、五人、十人、二十人いようが、みんなぼそぼそと坐ってるだけで、一明がいるところには必ず起こったあのばかばかしいほど壮大な知性の戯れの渦が、どこにも起こってこない。——「橋本一明のこと」『生きたしるし』（文藝春秋、一九九〇）所収

橋本一明は言うまでもなく、原口統三『二十歳のエチュード』という本によって、その編著者としてよく知られた人物だ。

原口統三は、京城・新京・大連といったいわゆる外地で生まれ育ち、一九四四年に第一高校学校文科丙類に入学した。早熟

の天才で、寮生のあいだで生前からすでに伝説的な人物だった。一九四六年十月に神奈川県逗子海岸にて入水自殺。翌年刊行された遺稿断章『二十歳のエチュード』はベストセラーとなる。と「定本」（ちくま文庫）の紹介文にある。

早くから自殺を口にしていた彼がいなくなると「いよいよ死にに行ったのだという噂が寮生の間にひろまった」と学友橋本は書いている。

この本のまえがき「訣別の辞に代へて」は、一明君と呼びかけて、「僕はこの小さな三つのノートを、君の手に渡さうと思ふ」と始まっている——

告白。——僕は最後まで芸術家である。一切の芸術を捨てた後に、僕に残された仕事は、〈人生そのものを〉芸術とすること、だった。

★

僕は冷たくありたかったのだ。「精神」への冒険に旅立ちたかったのだ。それは一切の温かいものを拒否すること、即ち「死ぬ」ことに帰着する。

★

僕にとって、自殺は一つの新しい飛躍である。——エチュードⅠ

詩人をやめた、という言い方が何度も使われている。詩人をやめた詩人が、だから人生を死によって飾るという表現を選んだということか。エチュードⅢの最後に挿入された、「詩poetryからの離縁が死 deathとの婚約に直結していた」という文言は意味深い。

橋本一明は、彼の死を「歌なき勝利」ととらえている——「彼は勝ったのだ。だがこの勝ちには頌歌がない。……　歌うことが彼には汚れに映る。そこにあるのは許容だからだ。しかし彼は歌いたかったのだ。」彼をとどめ得なかった自分の無力を恥じながら、橋本は友人の死をそんなふうに要約している。

定本の目次構成（詩編、死人覚え書き——書簡と遺書、回想、注釈・解説など）を瞥見し、寄せられた文章にざっと目をとおせば、二十歳前の青年の死が周囲の人たちにいかに大きな波紋をひろげたかが推察できる。歌うことをやめた詩人について、多くの残された人たちが回想をつづって、歌うことを引き継いでいるような感がある。

一九七〇年に「アカシアの大連」で第六十二回芥川賞を受賞した清岡卓行もそのひとりだ。清岡は原口の同級生の兄にあた

り、つねに原口から尊敬の目でみられていた。ふたりは異国的な生育環境を共有し、大連への最後の大陸旅行を共にした間柄だった。

後年、その旅行をモデルにして「アカシアの大連」の導入部を書いたと述懐している――「かつての日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに横に振るだろう」と始まるあの名品の誕生である。

エチュードを作ったのは

清岡卓行は原口を〈私の中の日本人〉と位置づけて当時をふりかえっている――

その間［原口との交際は］、わずかに一年と三箇月ほどである。

しかし、その時間はじつに長かったように感じられる。

橋本一明は、昭和二十年秋から翌年十月なかばまで、東京を中心に原口統三と交際したことについて、評論集『純粋精神の系譜』の中で、「実際、一年あまりのあいだだったのだ！　それがぼくの記憶には十年の月日のようにきざまれている」と書き、さらに、「今日にいたるまで、ぼくはさまざまのすぐれた知己を持った。だが、彼ほどの強力な精神を見たことがない」とも書いている。それと同じような感慨を、私もまた抱くものであると述べなければならないだろう。　――「私の中の日本人」を問われて

これを読むと、清岡卓行もまた後輩の原口と同じような問題、「憂鬱の哲学」を抱えていたことが分かる。そして原口統三の早すぎた死を清岡はこう解釈している――

彼の死の根底的な原因を、私は、〈風土のふるさと〉である大連とその家庭が奪われていたこと、そして、〈言語のふるさと〉である日本語による精神の純粋化、死への志向が、自他どちらからも破壊されないほど論理的かつ皮膚感覚的に形づくられていたことに眺めたのである。

その場合、彼の死への直進を、生の方へ引き戻すことができるものがあったとすれば、それは彼の意識ではなく無意識を、生の芳潤な魅惑によって動かし、精神の構造をその基盤から突き崩すものでなければならなかっただろうと、私には想像された。

もし、具体的にその「生の芳潤な魅惑」がありえたとすれば、それは彼の場合、おそらく、日本に〈風土のふるさと〉を再発見することだけであっただろう。

たしかに原口は、短い人生のわりには、死の直前まで、自分の場所を探し求めるようにあちこちとよく旅をしている。そしてこの見方は、清岡自身の小説の内的構造――いかにして生の芳醇さへと救われたか――をよく説明してくれてもいる。

『二十歳のエチュード』を作ったのは誰か、という素朴な疑問が頭をもたげる。

その答えは第一に、原口の遺稿ノートが中心だから、希有の才能をもった原作者自身が生み出したというものだ。だが第二に、死後それを託された橋本が編集し、プロデュースしたものだとも言える。また、その周囲の友人知人（東大仏文関係者たち）がこれを支えている。歌なき本を幾重にも囲んで、歌おうとしているようにも見える。またそれに和するように当時、多くの読者の共感を呼んで、エチュードの世界を拡大した。つまり答えは、特定のひとりふたりではなく、みんなして作り上げているということだろう。

この本を一読すれば、戦中・戦後の混乱期の空気がつたわってくる。食うものも、着るものもない時代。金もなければ、授業もろくにおこなわれない。栄養失調から貧血で倒れる学生もいる。そういう時代のエリート学生のひとつの青春のありようを見せている。そうした状況下だからこその一途なまでに純粋な生の追求姿勢がみられるのだ。

「暮らしは低く、想いは高く……」という時代のキーフレーズは、ここで過激なまでのかたちをとっているが、ある意味では時代を超えた多くの青春を彩る特性だと言えるのかもしれない。

戦時下で西欧文学に情熱的に傾倒した若い世代の才能が集まった外国語研究室の空気は、多分にこれに共通するものがあった。共通する基盤や雰囲気があるというのも当然だろう。橋本一明をとりかこむ多くの人材が、ここに集まってきていたのだから。

六、むすび／別れた友のテーマ

飯島耕一の短編集に『別れた友』（中央公論社、一九七八）というのがある。そのタイトルストーリーは、作者が終戦直後、岡山の寺で下宿生活をしているときに知り合った同宿・同学年

の友人の思い出をかたっている。

その友は早熟の文学青年で、ふりかえれば、作者が今の道を歩むのに、すくなからず刺激を与えてくれた「わたし」の分身ともいうべき存在だった。現在の憂鬱な状況（身近な人間の死、自分の精神的危機など）のもとで、久しく忘れていた友を思い出す。それは重なり合った自分自身を思い出すことでもある。

戦後の田舎町での精神的にも身体的にも〈飢えていた〉頃の文学的かつ人間的な交遊の日々。それは一風変わった人物や出来事に囲まれていたにせよ、現在とはちがう時間を生きていた、青春の健康な活力にみちていた日々であった。

物語の最後は、その友を精神病棟に残して別れる場面で終わっている。作者はこの青春の風土とかつての、そして親しい友と再交流することによって、壊れかけた自分をとりもどす。明日に向かって生きるとは、こういうこと――〈別れた友〉と心の中で再会し、自分の過去と現在を和解させて、はじめてできることなのだろう。

多くの物語がこのテーマを奏でている。現に生きている人間はみな大なり小なりこのテーマを奏でているとも言える。「ゴヤのファースト・ネームは」の一節にも同じく「あの死んだ男」と立ち直りのテーマが登場していた。

原口の『二十歳のエチュード』も清岡の「アカシアの大連」も、よく似たところがある、これが彼らに共通する青春の構図かと思わせるほどに、同じ〈別れた友〉のテーマを奏でている。

清岡卓行の精神的自叙伝というべき「アカシアの大連」は、原口の自殺願望にも通じる憂鬱の哲学から、アカシアの花が象徴する女性、ないし女性的なものによって救われる物語だ。〈別れた友〉は都市大連であり、そこでの経験を集約する〈幻想的女性〉もしくは、それを体現する亡き妻のイメージでもある。

かつての語研の交遊、それぞれの道へと旅立っていった人たち、その半世紀に近い歴史を早送りしてみれば、やはりこのテーマが一貫して流れていることを知る。青春の物語はすべからく〈別れた友〉の物語なのだろう。

裏返せば、出会いがあってはじめて別れがあるのだし、濃密な人間関係があってはじめて他者が自分の一部分となるのだ。もっと言えば、それはなくしてはじめて分かることであり、過ぎてはじめてかたることができるものかもしれない――それが青春のかたちであり、経験のアイロニカルな認識の仕方なのかもしれない。

生きることは「失う技術をまなぶこと」だと詩人エリザベス・ビショップが言っていた――

「失うことは　むつかしいわざじゃない／多くのものには失われる意図がそなわっているから／失うことは　わざわいじゃない」[4]

別れも失うことと同義だから、新しい出会いにはたぶん、別れの意図がそなわっているのだ。これにならって、語研の青春群像が体現する〈別れた友〉というテーマの意味を、さらにひろげて考えることもできるだろう。

青春のつきつめたかたちである交遊、友情であれ恋愛であれ、その出会いと別れは、ひとしく他者体験の一種だから、異性体験もしくは異境体験と同一線上に位置づけられる。

ここでとりあげた多くの作家たちは、それぞれの〈外国体験〉が人生の一大転機になったことをくりかえしかたっていた。〈別れた友〉をかたるように、異国の体験がかたられるのだ。

そもそも語研の存在は学内に異質な外気をもたらすものだった。そして多くの有能な人たちが外国体験から、さらに新たな刺激を持ち帰ってきた。

逆に言えば、かりに國學院大學そのものを一個の人格に見立てるなら、その戦後の外国体験、いわば青春留学体験にたとえられるべきものが外国語研究室の内包した歴史的意義だったのではなかろうか。

語研の歴史的遺産に相当するものは他に何があるだろうか、そしていまどこにあるのだろうか。おおかたは失われたか、あるいはなくしてはじめて分かる性質のものかもしれない。たとえば、戦後の「暮らしは低く、想いは高く」のフレーズが、語研にあっては外国体験への憧憬というかたちで生きてきたとも言える。

長く語研の歴史とともに生きた中野孝次にとって人生の転機となったもの、つまり彼の〈別れた友〉は、橋本一明の死と自身のドイツ留学体験だった。

憧れのヨーロッパでの滞在について――「わずか一年とはいえ国内でのどんな一年よりも密度の濃い、決定的な作用を及ぼした日々であった」と述懐している。そして亡き友橋本については、自分の著作の背後に彼の亡霊を見ながら中野は、かつて自分の書いた小説をこてんぱんに批判され、すっかり自信をなくしたことを思い出している――

要するにわれわれは青春というものの中にいたのだ。そしてこの青春は、議論による文学的覇権の獲得を軸としていたから、凄惨で、情熱的で、アンビヴァレントで、きわめて教育的だったのである。　――「橋本一明のこと」

文学的青春の「凄惨で、……きわめて教育的」な様相などは、ふりかえってはじめて分かることだ。いや、これにかぎらず、たいていそういうものかもしれない。

ここへきてわたしは、物語についての古典的な見解のひとつを想起する――「レシには、二人の主人公が存在する。一方は死に、もう一方は物語を語るために生き残る」と。そして、内なる他者との出会い、未知との遭遇（あるいは覇権の争奪）に物語の出発があるのだという。[5]

それこそ〈別れた友〉のテーマを言い換えたにひとしいのではないだろうか。だからたぶん、青春というものはふりかえる物語の中にしか存在しないし、物語の多くは失ってはじめてかたることができる性質のものかもしれないのだ。

ながながと〈外国語研究室の青春〉という昔話をかたってきたが、人生のまっただ中にある学生諸君はどう考えるか、疑問を投げかけて、わたしの話のむすびとしたい。

注

（1）この文章は、「國學院大學の歴史と未来」と題した教養総合講座の中で、平成二十三年度から二十五年度まで筆者の担当した講義「外国語研究室の半世紀」の原稿を元にしている。

（2）関連略年表を揚げておく――

昭和38（一九六三）　法学部第一部開設／渋谷体育館新設
昭和40（一九六五）　法学部第二部を開設
　　丸谷才一助教授退職（平成24年没）
昭和42（一九六七）　八王子校舎で授業開始
昭和44（一九六九）　橋本一明教授没
昭和47（一九七二）　菊池武一教授没
昭和48（一九七三）　飯島耕一教授退職（平成25年没）
昭和56（一九八一）　中野孝次教授退職（平成16年没）
昭和57（一九八二）　創立百周年／資料室体制の整備
昭和59（一九八四）　神奈川グランドに校舎設立／八王子分校での授業終了
昭和60（一九八五）　新石川校舎で授業開始
平成4（一九九二）　たまプラーザキャンパスへの全面移転（第一部一・二年生）
平成5（一九九三）　佐藤信夫教授没
平成7（一九九五）　成瀬駒男教授没
平成8（一九九六）　文学部に外国語文化学科新設
平成9（一九九七）　伊藤晃教授定年退職（平成20年没）
平成13（二〇〇一）　種村季弘教授退職（平成16年没）
平成16（二〇〇四）　百二十周年記念1号館竣工
平成17（二〇〇五）　米川良夫教授退職（平成18年没）
平成18（二〇〇六）　若木タワー竣工
平成20（二〇〇八）　渋谷キャンパス新図書館の開館

（3）野家啓一『物語の哲学』（岩波文庫、二〇〇五）

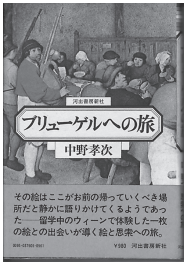
（4）「一芸」、小川未散編訳『エリザベス・ビショップ詩集』（土曜美術出版、

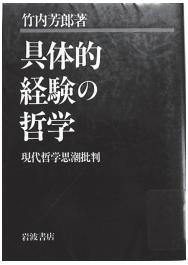
二〇〇一）所収

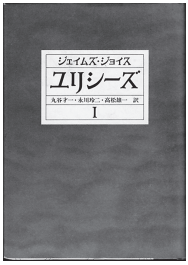
（5）ヒリス・ミラー、馬塲弘利訳『文学の読み方』（岩波書店、二〇〇八）

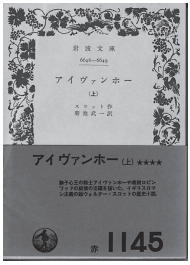
◆図版・参考図書

中野孝次／丸谷才一／菊池武一／原口統三／飯島耕一／種村季弘／佐藤信夫／竹内芳郎









◆旧図書館の正面風景